

# 戦前期に発行した小説から考える、 台湾文学史における西川満の位置づけ

王 頂 倨

Reconsidering Nishikawa Mitsuru's Place in the History of Taiwanese  
Literature from His pre-World War II Novels

WANG Dingjiu

Nishikawa Mitsuru's literary movement is important for most Taiwanese. It is because of his insistence on literature that Taiwanese literature was able to develop into today's spectacular body of works. Due to descriptions of the Colonization Movement, however, Nishikawa's works are opposed by Taiwanese and the target of criticism. Nevertheless, Nishikawa's literature is very important, and it is impossible to ignore him and his works in discussions of contemporary Taiwanese literary history. This article focuses on Nishikawa's novels published in Taiwan before World War II, and, after analyzing their characteristics and issues, it rethinks the significance and value of Nishikawa Mitsuru's literature in the history of Taiwanese literature.

Keywords: Nishikawa Mitsuru; History of Taiwan literature; Colonization Movement

## 一、はじめに

1987年、戒厳令が解除されるまで、台湾人は自分の考えを忌憚なく吐露することができなかった。その後、積極的に政治改革が行われ、台湾では民主自由への道が急速に進み、ついに、今日のように、自由発言が謳われるようになった。政治、経済、文化など様々な分野における言論の自由に伴い、日本統治期時代の台湾文学の研究も行われるようになった。

台湾文学の発展が始まったのは、日本に統治された後のことである。その51<sup>1)</sup>年間、日本人が台湾で展開した文学活動は、初めて台湾人に「台湾文学」を意識させた。つまり、台湾文学の発展は統治期の台湾で活躍していた日本人とは切り離せない関係にある。特に、注目したいのは西川満という作家である。なぜなら、西川満は小説、詩作など多様な分野で台湾文学の発展を推し進めながら、文学作品に台

---

1) 日清戦争の敗戦により、台湾が日本に割譲された。1895年4月17日から1945年8月15日、日本敗戦までの51年間、台湾は日本の植民地となっていた。

湾の趣を表現するために、様々な台湾風物から題材を発掘しようとしたからである。残念なことに、台湾文学史でも、日本文学史でも、西川満に関する説明がなく、西川満を研究対象とする先行論文もまだ少ない。

現在、日本統治期における西川満文学の研究は、中島利郎と陳藻香らの研究者によって行われている。中島利郎は、西川満の全書誌を編集し、「西川満と日本統治期台湾文学——西川満の文学観」（1995、『よみがえる台湾文学』、東方書店）を発表した。陳藻香は『戦前台湾における日本文学——西川満を例として』（1996年、台湾東呉大学日本文化研究所に提出した博士論文）という論文集で、西川満戦前の経歴、活動及びすべての作品内容を取り上げ、詳しく分析を行った。中島利郎と陳藻香に続き、張良沢や藤井省三などの有名な研究者も西川満の研究に取り掛かっており、その成果が期待されている。

しかし、西川満の作品研究には、まだ検討されていない部分が多く残されている。例えば、西川満作品の中で、台湾が描かれた場面において、彼が最も訴えたいものは何だろうか。また、台湾を描くことにより、台湾文学史にどのような意義が与えられたのか。そこで、本稿は台湾時代に西川満が発表した小説を取り上げ、それらの作品を検証し、台湾文学史上における西川満の位置づけを見直したい。本稿では西川満が描いた台湾関係の小説の問題点と特徴を探ることで、台湾文学史における彼の文学価値を明らかにすることを目的とする。

## 二、台湾時代の西川満とその文学観

西川満の略歴を論じる上で、現在最も利用されている文献は『わが越えし幾山河』（1990年、人間の星社）と『西川満自伝』（1981年、人間の星社）である。以下は二冊の記載に基づき、台湾時代の西川の略歴をまとめてみる。

### 1. 文学における略歴

西川満は1908年2月20日正午、會津若松市善久町（現、日新町）19番地に、秋山清八の初孫として生まれた。父の西川純と母しげの長男である。3歳の時、西川純は叔父の秋山義一が経営する炭鉱の支配人として赴任するため、一家を連れて、台湾に渡った。行き先は基隆であった。秋山義一一家が日本に戻る前に、西川一家は炭鉱の事務所に住んでいた。1916年、西川満が7歳の時、一家は台湾人の町大稲埕で生活を始めた。大稲埕ならではの年中絶えない様々な祭り、台湾風の建築や台湾特有の文化が西川満の心を引き付け、のちに大稲埕を舞台とした数々の作品が生まれることになる。

西川満が9歳の時、父は秋山義一が経営した台湾瓦斯会社の副支配人となり、一家は淡水河の近くに移った。新起後街は万華の入り口で、古い町である。西川満はここで森川正枝に出会い、初恋を経験した。大叔父のガス会社が閉鎖するとともに、一家はまた大和町に引っ越した。大和町のあたりでは清朝建築特有のエキゾチックな建物に興味を持ち、そこで、西川満は初めて劉銘傳のことを知った。1914年に台北尋常小学校に入学して、担任の青木先生に教わった。1920年に台北中学校に進学して、全校雄弁大会に毎年出席して、いつも賞を取った。また、1923年の1月に、『台湾新聞』の新年文芸に応募し、小説「豚」が第一席となる。中学校に五年間通い、満は初めて文学に拘る態度を示し、詩集を作り始めて

いた。

1925、6、7年、台北高校の受験を重ねて失敗し、早稲田第二高等学院にも受からなかった打撃は満を宗教へと導いた。翌年の入試まで、西川満は基隆で半年間税関監吏として働いた。1928年に早稲田高等学校に入学し、フランス語に魅了され、必死に勉強した。1930年、高校を出て、無事に早稲田大学仏文科に入学した。吉江橋松、西條八十らの教えを受け、西川満は新しい文学の道のりを開いた。

大学の卒業にあたり、西川満は台湾に戻り、文学活動に従事することを決意した。1934年9月、西川満は台湾日日新報社に入社した。学芸欄の編集を担当し、『愛書』（1933年6月～1942年8月25日、台湾愛書会）を編集し、そして多くの学者や作家と出会った。しかし、西川満が本格的に、台湾で文芸活動を展開したのは1934年1月に、自宅で「媽祖書房」を設立してからのことである。雑誌『媽祖』（1934年10月10日～1938年3月3日、媽祖書房）を皮切りに、多くの限定本、詩集と雑誌を刊行した。1938年、『媽祖』の終刊とともに、「媽祖書房」を「日孝山房」と改称した。同時に、詩に対する熱意を称えられ「詩業功労賞<sup>2)</sup>」が送られた。

台湾で詩を広く発展させるため、1939年、西川満は「台湾詩人協会」を成立し、63人の作家を収録した『華麗島』（1939年12月1日、台湾詩人協会）を刊行した。後に、「台湾詩人協会」を改組し「台湾文芸家協会」を設立し、雑誌『文芸台湾』（1940年1月1日～1944年1月1日、台湾文芸家協会）を刊行した。『文芸台湾』は全台湾の作家を網羅した雑誌であり、その発行により、台湾の文学界は盛り上がった。

作家として自立するために、1942年、西川満は台湾日日新報社を退社した。同年10月、東京で開催された「大東亜文学者大会」に出席した。その後小説『赤坂記』（1942年12月、書物展望社）が「台湾文化賞」を受けた。1944年5月、台湾総督府情報課の要請を受け、鉄道各機関などを見学し、戦時体制の文学を執筆した。翌年1月、西川純の後を継ぎ、樹林の昭和炭鉱社長に就任した。しかし、日本の敗戦により、旧総督府情報課の課員が「戦犯名簿」を提出し、西川満は台湾文化の最高指導責任者と告げられることになる。死を覚悟したが、免れて1946年に、西川一家は日本に戻る。

## 2. 文学観にこだわる態度

西川満は作品の構成において、「漢文化」と「異国情緒」が重要視されている。それは子供の時、太平街の大通りで、漢字に対する態度を父に教えられたことによる。また、新聞紙を踏んだことにより、父に厳しく説教され、文字への態度が一変したからでもある。さらに台湾に文字を尊敬する惜字塔があることを知って以来、一生漢字を尊敬するようになった。

8歳の時『古戦場物語』（小瀧淳著、昭和10年、時習館）を受け取ったことを契機に、いっそう読書の楽しみがわかってきた。「台湾日日新報」に入社した後、学芸欄編集担当の職務を通じ、台湾総督府図書館を自由に利用できるようになった。そこで西川満は様々な漢籍にめぐり合い、漢文化の世界を楽しん

---

2) 「文芸汎論詩集賞」は1935年に創立され、毎年当選者を発表。1038年は菱山修三の「荒地」が当選。しかし、佐藤春夫の提案で特別に「詩業功労賞」を設け、西川満に贈与。

だ。その喜びとして、西川は台湾を「無限の歴史の宝庫<sup>3)</sup>」、「花咲く宗教のギャラリー<sup>4)</sup>」、「まだ磨かれざる史界のダイヤモンド<sup>5)</sup>」などと高く評価した。

一方、1914年、台北大稻埕の入り口に移ったことが西川満文学の構成に与えた影響にも注目したい。漢民族の町として、大稻埕は日本内地とはまったく異なる異国情緒が漂っていたからである。小学生の西川満は、大稻埕の大通りの両側に並んでいる洋風の建築物を見るたびに、いつも幻想的な気分をした。また、劉銘伝の時代に建てられていた六館町とそのあたりのセンチメンタリズムの景色に魅了されていた。台湾特有の相思樹、木造の洋館、アーチ型の窓、水が少ないちょっと汚れたクリークなどの風情を見るために、小学校から帰ると、西川満はいつも内地人の住んでいる鉄道官舎の前を通らず、台湾人の裏町を通り抜け、クリークづたいに、六館町に行った。文学者として出世して以来、西川満は何度も六館町の異国情緒をテーマに、作品を執筆したことがある。

この漢文化への理解と異国情緒への愛着がのちに、西川満作品の構成で最も重要な鍵となっている。しかし、西川満にとって、文学とは単純な事実を語るものではなく、それは工夫しなければならないものである。『西川満自伝』では、「この世で、最も憎むのは「事実は小説より奇なり<sup>6)</sup>」という考えで、小説が事実のままならぬと強く主張している。また、昭和14年6月号の「台湾時報」に、西川満は鬼谷子という署名で、次のように記している。

大衆はどう感ずるもよし、文章や美術はあくまで芸— Art である。大衆に誤解されるを恐れて、芸術をまげる勿れ。まげるなら、むしろ真実だ。芸術の世界は、まず真実を超えることから始まる。さらに、1943年4月に葉石濤<sup>7)</sup>に送った手紙の中に、再び人工美に拘る立場を示している。

小説は面白いのが本道である（中略）写実なくして小説はあり得ない。いついかなる場合でもカメラのように移す写実精神は必要であるが、写実は単なる写実に終わったのでは、それは小説になり得ない。

以上のことから、西川満は自分の文学創作において、耽美的な人工美世界を求め、それをベースに文学活動を展開していったことが明らかとなった。

### 三、西川満の作品の特徴

台湾時代に西川満が発表した小説のうち、「台湾縦貫鉄道」を除き、短編小説は全部で19編があった。本章では19編の初出と刊行時間を表Iで示しながら、小説の特徴を検証してみる。

3) 1938年2月1日『台湾時報』2月号、「歴史のある台湾」65～67頁。

4) 1938年2月1日『台湾時報』2月号、「歴史のある台湾」65～67頁。

5) 1938年2月1日『台湾時報』2月号、「歴史のある台湾」65～67頁。

6) 『西川満自伝』25頁。

7) 1925～2008。台湾台南の生まれ。台湾文学の先駆者として、多くの作品を発表しながら、文学評論にも取り掛かる。

表 I

作品名	初出／発行時間
城隍爺祭	『台湾婦人界』 第一巻第二号／1934年 6 月 1 日
鴨母皇帝	『台湾時報』 1934年 7 月、 8 月
楚楚公主	『媽祖』 第二巻第一冊／1935年11月15日
梨花夫人	『媽祖』 第二巻第六冊／1937年 1 月10日
十二娘	『媽祖』 第三巻第一冊／1937年 3 月10日
劉夫人的秘密	『媽祖』 第三巻第三冊／1937年12月22日
瘟王爺	『文藝汎論』 1939年 6 月号
赤嵌記	『文芸台湾』 第一巻第六号／1940年12月 1 日
雲林記	『文芸台湾』 第二巻第一号／1941年 3 月 1 日
龍脈記	『文芸台湾』 第四巻第六号／1942年 9 月20日
元宵記	『新潮』 1941年11月
朱氏記	『文芸台湾』 第三巻第四号／1942年 1 月20日
採硫記	発端篇『文芸台湾』 第三巻第六号／1942年 3 月20日 中篇『文芸台湾』 第四巻第一号／1942年 4 月20日 下篇『文芸台湾』 第四巻第二号／1942年 5 月20日
浪曼	『文芸台湾』 第三巻第二号／1941年11月20日
動力の人	『台湾時報』 1941年 6 月 1 日
台湾の汽車	『台湾時報』 六月号／1942年 6 月10日
二人の獨逸人技師	『台湾鉄道』 第三六号／1942年 7 月20日
牛のゐる村	『文芸台湾』 第五巻第六号／1943年 4 月20日
桃園の客	『日孝山房』 より発行／1943年10月15日

表 I の作品を分析した結果、西川満の短編小説は「台湾の方言の使用<sup>8)</sup>」、「台湾文化の再発見<sup>9)</sup>」に拘るほか、次の特徴が見られる。

## 1. 表現力の駆使

西川満は想像力をうまく働かせる作家である。台湾での生活経験とフランス文学の薫陶はもちろん、異国情緒に執着する態度が西川満に文学の表現力を向上させた。3歳で台湾に渡ったにもかかわらず、西川は台湾が植民地となる前に台湾に渡来した「渡来者」とは異なり、台湾の風土文化にはあまり馴染まなかった。いわゆる「第二世<sup>10)</sup>」である。特に西川満の場合は、坊ちゃんとして育ったので、台湾人の実際の庶民生活は理解できず、台湾の文化と風俗への認識はほとんど読書によるものであった。しかし、本当台湾のことをあまり理解できないからこそ、西川満が思う台湾の姿を小説の世界で自在に表現できるのであろう。

代表的な作品は伝奇小説集『梨花夫人』（昭和15年 7 月22日、東京書籍株式会社）である。『梨花夫人』

8) 『東アジア文化交渉研究』 第 3 号「戦前期の西川満の詩集に現われる閩南語の意義」（261～278頁）を参照。

9) 『千里山文学論集』 第83号「西川満『華麗島頭風録』の研究——台湾風俗の特徴と発刊の意義について——」（195～211頁）を参照。

10) 近藤正己『西川満札記』 2 頁。

に収録された小説は「瘟王爺」を除き、ほとんどのストーリーは架空の世界で発生したものである。中国の古典文学『聊齋志異』を取り上げた部分もあれば、西洋のロマンを小説に取り入れる部分もある。どの作品も表現力を巧に駆使し、小説に神秘的な雰囲気を漂わせ、悲しみと不思議さを読者に共感させる趣がある。「茉莉花の匂う部屋、白い壁紙、白い寝臺、そして十二娘は純白の長衫をまとって椅子にもたれていた。<sup>11)</sup>」、「細面の、きれの長い眼、すらりとした瘠身、それは華美な装ひよりも、清楚な身なりの方がよく似合った。<sup>12)</sup>」「細長い眉、怨むかと思はれるばかり凄艶な青い眼眸、琥珀色の頬、二粒の野苺の実のように紅い唇<sup>13)</sup>」など、小説の場面と人物像の描写において、西川満はことに表現力に拘り、感傷的に描いた。

## 2. 両親による人間像の構築

西川満の父、西川純は明治法律専門学校で学び、世の不正に挑戦しようとした、明治生まれの理想を追求する人物である。のちに日露戦争の最中に、軍人として召集されていたが、その志は薄れることなく、さらに強まっていく。

とにかく、父は硬骨漢だった。小さいときから、お伽噺などはしてくれたこともなかったが、身を殺して仁をなす、古い中国武人の話はよくしてくれた。人のために命を投げ出すというのが、最高の理想であった<sup>14)</sup>。

台湾で経営する紅葉商事が倒産したにもかかわらず、一家のために、西川純はその難関を乗り越えた。また、台北の建設と市民の福祉を図るために、台北市議員の選挙に参加し、二回とも当選した。この堂々とした父は日頃から常に西川満に、物事への正確な態度と正しい人間の姿勢を教え導いた。やがて西川満の小説に、その父の人間像をモデルにした主人公が何度も登場した。

「元宵記」に登場する主人公、潘永清は新街の建設にあたり、街の繁栄よりも、学問と教育に拘り、商業の街を選ばず、学者の街の開発を選択することにした。潘永清のこの姿勢は正に、満の父、西川純の理想像である。「元宵記」に続き、「採硫記」に登場した主人公、郁永河は民のことを思い、50万斤の硫黄を手に入れるために、様々な難関を乗り越え、ついにその目標を達成した。この話の描写でも、西川純の人物像と一致している箇所が多いのである。

厳しい父に対して、西川満の母、しげは大和撫子の性質を持っている優しい女性である。『西川満自伝 少年時代』（1981年3月23日、人間の星社）には、母について次のように書かれている。

もっとも感謝しなければならないのは、父と母とが争っている姿をただの一度も見なかったことである。どんなに父が怒っているときでも、母は優しく微笑んで、決してとりあわなかったからである。(中略) わが生涯において、母にまさる女人はなく、母ほど愛した女人もない。(中略) 母は死に際してまで、祈りとは感謝であることを、身をもって教えてくれたのだ<sup>15)</sup>。

11) 『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』第一巻（1998年7月20日）169～170頁。

12) 『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』第一巻（1998年7月20日）171頁。

13) 『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』第一巻（1998年7月20日）171頁。

14) 『西川満自伝 少年時代』（昭和56年3月23日）48頁。

15) 『西川満自伝 少年時代』（昭和56年3月23日）67～68頁。

西川満にとって、しげは肌が白く優しい美人である。その考えは自分が成長するとともに、初恋の森川静枝、夫人の田中澄子、また媽祖という女神と出会うことを契機に、ますます女性に対する尊敬の念が現れるようになった。以来、雑誌『媽祖』に発表した「楚楚公主」を皮切りに、女性を主人公とする作品を多く発表した。これらのヒロインたちは弱そうに見えるが、皆強い心と清らかな美しさを持ち、つまりしげの姿と重なる場面が多く取り上げられる。台湾の風俗と文化を背景に、西川満は両親の人間像を作品に構築し、台湾文学の樹立に取り掛かろうとした。

### 3. 台湾民間伝説との関わり

西川満の作品の多くは台湾の民間伝説、風俗から取材した。台湾人に親しんでいる民間伝説が小説化され、面白く描き上げられた。そんな中、既に台湾人に忘れられた伝説もあれば、これから次の世代に伝承していく故事もある。台湾の民間伝説の再発見として、西川満が描き直した台湾の民間伝説は台湾の歴史と風俗を理解するのに貴重な参考資料となっている。

短編小説の「鴨母皇帝」と「瘟王爺」の二つは台湾人に最もなじみ深い作品であろう。「鴨母皇帝」とは、自ら「中興王」と名乗り、俗に「鴨母皇帝」と言われた台湾の歴史に実在した朱一貴のことである。朱一貴が高雄鳳山縣羅漢門（現在、内門郷）の川辺でアヒルを飼い、当時鳳山県の知事の苛政に抵抗しようとしたが、結局中国から来た清軍に破られた話である。西川満が描いた「鴨母皇帝」は史実に基づいたが、朱一貴の「起義」にあたり、自分が明の後裔であることを「乩童」による「神のお告げ」を通じて、宗教を盲目的に信仰した民衆に信服させる部分しか描いていない。それでも、故事本来の意味を伝えるだけでなく、読者に面白く読ませる。

「瘟王爺」も台湾における有名な民間伝説の一つである。「瘟」とは熱帯地域にだけ流行るペスト、コレラ、マラリアを指す伝染病である。「瘟王爺」は疫病の神様の話であり、「瘟神」を祭り、疫病を鎮める話を取り上げられている。「鴨母皇帝」の話が台湾のテレビ局にドラマ化されたように、今日の台湾でも、場所により疫病を退治する伝統行事<sup>16)</sup>が残り、台湾人が疫病を畏怯する態度を示している。

以上、西川満が台湾時代に発表した作品の特徴を考察してきた。西川は台湾語と台湾文化があまり理解できなくても、台湾語の使用、表現力の駆使、両親による人間像の構築、台湾民間伝説との関わりや台湾に対する特有の感情を作品に取り入れることにより、台湾で変化に富んでいる西川満文学を作り上げたのである。

## 四、西川満の作品における問題意識

前章では、西川満は日本人であるので、台湾風俗の中で育ったわけではない。そのゆえ、台湾の風俗をそのまま取り入れるのではなく、台湾風俗を自分でアレンジして取り入れている。しかし、そういう描写は必ずしもすべての台湾人に好まれるわけではない。特に、台湾人の思想と歴史の描写において、多くの場面が台湾人に批判されている。本章では西川満が描いた台湾を、台湾人の視点で考え、その問

16) 例えば台南の塩水では、疫病を退治するために、例年「放蜂炮」という伝統行事を行う。

題を考察する。

### 1. 戦争体制の協力と日本人の優越意識の主張

西川満が正式に皇民化運動に協力の姿勢を示していたのは、1942年10月に東京で開催された第一回大東亜文学者大会<sup>17)</sup>に参加してからのことであろう。その実践として、西川は戦争を賛美する詩集『一つの決意』（1943年6月、文芸台湾社）を刊行し、長編小説「台湾縦貫鉄道」を『文芸台湾』（1940年1月～1944年1月、台湾文芸家協会）誌上で連載を始めた。また、1943年11月に開かれた「台湾決戦文学者会議」で、自分が編集した雑誌『文芸台湾』を廃刊し、代わりに台湾総督府情報課の長崎浩の『台湾文芸』に協力する心構えを強めていた。

自分が愛する台湾文学を政治へと転換した態度は、当時西川満が固めた文学観を裏切り、自分が統治者である日本人の立場に立っている姿勢を少しでも見せてくれる。この変化について、西川満が果たして当時の台湾総督府に指示されたかは明らかになっていないが、台湾の歴史を小説に取り上げた時、西川は既に皇民化運動に協力していく傾向を示している。

「雲林記」では、

沙棠（現在の梅里尚徳）はもう寝たかしら。あの子は台南の国語学校に入学させよう。これからはどうしても国語を習得せねばならない。さうして、もしも私一代で御奉公が出来ない場合は、あの子に、いや、その孫に、二代三代にわたって、わが血の流れる限り、皇民としての誠を呈し、郷土のために尽きさせよう。私は日本人になったという自覚をもつことを何よりの誇りとする<sup>18)</sup>。

「赤嵌記」でも

高度国防国家建設の急務とする今日、個人の自由や平安をかえりみてる場合ではない。自分はあくまで監國の職務を守り、父祖の遺業を継がなければならぬ。ただ社稷のために<sup>19)</sup>。

と書いた。皇民の子孫として、日本のために、西川満は台湾を建設しなければならないと呼びかけている。

「赤嵌記」は西川満が江日昇の『台湾外記』に基づき、鄭成功の三代目の子孫である鄭克塽をめぐる宮廷闘争を描いた作品である。しかし、西川満は「赤嵌記」で、鄭成功の母が日本人であることをしばしば強調し、鄭氏が明朝を復元するために、南方に侵略した事実を強調した。この描写から、大東亜戦争において、日本が領土を南に拡大した南進政策を合理化させようとする意識が見られる。

幼い日寝物語に祖母からいつも聞かされた祖父成功の義烈であり勇武である。祖父の母は日本人で、それが祖父一代唯一の自慢であったと言う。してみれば、この俺の五尺の体内にも脈々として日本の血液が流れているに違いない。この血をいとほしめ、この血の命ずるまま南方に進むのだ<sup>20)</sup>。

また、雑誌『文芸台湾』を創刊した後、西川満は台湾総督府との提携が多くなってきた。文教局から

17) 日本文学報国会が主催。1942年日、満、華、蒙の代表的文学者を東京に招き、日本文化の真の姿を認識するために、具体策を論議する会議。

18) 『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』第1巻264頁。

19) 『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』第1巻227頁。

20) 『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』第1巻226頁。



特別補助を受けたほか、総督府の情報課の要請の下で、鉄道各機関、石炭炭鉱、台湾船渠や斗六國民道場を見学し、「幾山河」、「戦争と勝利の結晶石」など、戦争に関わる作品を発表した。例えその裏に台湾総督府からの威圧があっても、文学者として、西川満はほかの作家よりも積極的に、皇民化運動に協力した姿勢が見られ、妥当ではないと思われる。台湾文学の開拓者として、西川が戦争文学を頻繁に執筆した態度は、台湾文学の発展に大きな影響を与えただけでなく、多くの台湾人作家の心を傷つけたのであろう。

## 2. 台湾人の思想の否定

台湾で小説を描いた時、西川満は作品の趣を増やすために、しばしば耽美的、虚構的な手法で、台湾の風物をとらえようとした。そのため、台湾人とは異なる考え方がしばしば彼の小説に取り上げられ、イデオロギーの問題を起こしていた。2010年の現在でも、統治者側に立っている西川満が当時どのように台湾と台湾人を見ているかが重要な論題となっている。

台湾で長年生活し、そこを第二の故郷として認識しても、西川満は台湾人の感情をあまり理解できていない。多くの作品から、台湾人の思想を無視し、その伝統価値を否定した場面が見られる。歴史小説「龍脈記」は、台北と基隆を連結した鉄道の建設中に、ベツケルとピテラン二人の技師が遭遇した困難を取り扱った話である。しかし、西川満は台湾人の思想をほとんど認識していないため、台湾人の思想価値を皮肉を交えて描写した。特に、中国人が最も重要視する龍脈と、その世代に伝承する風水の説を批判的に説明し、台湾人の伝統思想を認めない。

龍脈の祟りだ。(中略) 鉄道の建設は中止すべきだ。(中略) やつぱり龍脈の祟りだ。人の虚を衝くささやきが、また其處此處でかはされた。不幸にして死んだ人の棺は(中略) つまり龍脈の突起したところで、風水上きはめて重要視すべき場所です。単なる龍脈を荒らすのとは違って、まかり間違えば最悪な事態が起こるかもしれません。(中略) 龍腦の下が空洞になれば、龍腦の価値は傷つけられる。それに萬一トンネルを掘つたために、龍腦に変動でも起こつたら……<sup>21)</sup>。

台湾人の風水迷信をテーマに、西川は「龍脈記」で台湾人が近代化の象徴である鉄道建設を拒否する様子を描写し、外国人が台湾に文明発展をもたらしたことを強く強調している。この小説で、西川満は台湾人思想の遅れを風刺しながら、外来者こそ台湾の開発に手柄を立てたことを描いている。

この小説が執筆される前に、台湾人について、西川満は次のように描いたことがある。

神戸の埠頭で、荷役する人を見、東海道線の車中から大地に働く農民を見たときの驚きはまさに戦慄であった。——内地人もまた肉体労働をするのか。なにしろ、台湾では内地人は官吏に非んば商人で、労働者や農民は一人もいない。見たところがない。恥ずかしいことだが、坊ちゃん育ちの無知なわたしは肉体労働をするのは本島人(台湾人)だと思い込んでいた。(中略) 台湾で育った悲しさ、士、農、工、商は言葉の上だけで、私は士と商しか知らずに育ち、農と工とは、本島人だけがする業だと思い込んでいたのだ<sup>22)</sup>。

21) 『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』第1巻55～67頁。

22) 『西川満自伝』少年時代68頁。

また、基隆で税関の仕事を辞める直前の元旦に、一家団欒のために、台北に戻った。その後、家の近くで散歩した時に、破れ衣を着けた半裸で、畑を耕した農民の姿に驚いた。

正月は休憩したり、遊ぶものだ、と思い込んでいた私にとって、元旦に晴れ着をまとうずに働く人がいるのはショックだった<sup>23)</sup>。

統治時代の台湾は生活水準が非常に低く、まともな食事もできない百姓が多い。西川満は恵まれた環境で成長したため、もちろん一般的な台湾人が生活するための苦労を理解できなかったのである。そして、このような成長環境の違いで、西川満は台湾人の思想を受け入れず、否定したのである。

### 3. 台湾の歴史の改竄

西川満の小説は、しばしば戦争体制の協力や、台湾文化の無理解にもとづく描写で、台湾人に否定されている。そんな中で最も台湾人に批判されている点は、台湾の歴史を作品で勝手に変えたことであろう。古くから発生した歴史の真相と記録を自分なりに、または当時の皇民化運動の流れを背景に、書き直しているのである。その結果、台湾歴史の価値を低くしただけでなく、歴史自身が教えてくれた教訓とその本意も失わせてしまったのである。

随筆「歴史のある台湾」で、台湾の歴史について、西川は次のように述べた。

ああ台湾！汝こそは無限の歴史の宝庫、花開く宗教のギャラリー、未だ磨かれざる史界のダイヤモンド！ああ台湾、汝こそ、西欧と東洋の文化の融合する華麗島。私は台湾に住む光栄をよろこび、開拓すべき歴史への興味に湧き立つてゐる<sup>24)</sup>。

しかし、実際に台湾の歴史関係に関わる小説を執筆している時、西川はあまり正史を採用せず、自分の構想で作品を編纂し、台湾の歴史の捉え方とその実践に、明らかに矛盾した態度を抱いている。

「採硫記」という小説は郁永河の『裨海記游』（1979年3月、台湾衆文圖書股份）をもとに、書き直した作品である。台湾で硫黄を採掘するために、郁永河は台湾へ派遣され、そして『裨海記游』で当時台湾の様子を記録し、自分が台湾で体感した不安と恐怖も記した。郁永河にとって、硫黄の採掘は大変なことであるが、もっと怯えていたのは台湾で遭遇した病気、虫などである。それについての記事は『裨海記游』にしばしば見られ、読者にまだ開拓されていない当時台湾の恐ろしい姿を教えてくれた。しかし、この描写が西川満に書き直されると、『裨海記游』が訴えたいイメージとはまったく違う小説になってしまった。

西川満が描いた郁永河は幼い頃から台湾に憧れ、台湾に親しみを持っている人であり、そして彼が認識した台湾は素晴らしい宝島である。こうした描写は『裨海記游』に記録されていた台湾の姿とは異なるだけでなく、郁永河当時の心境も完全に否定している。「採硫記」との重なる部分を例として併記してみる。

土性輕浮，風起揚塵蔽天，雨過流為深坑。（中略）蕪地尚多，求鬪土千一耳（中略）海外丸泥，不足

23) 『西川満自伝』少年時代69頁。

24) 『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』第1巻451頁。

為中國加廣<sup>25)</sup>(訳:土の性質が悪く、風が吹くと埃が空を覆うほど漂い、雨が降れば、湖ができるほど、(中略)利用できない土が多く、開拓するのが難しい。(中略)海外の丸い泥地として、中国の土地に納入する意味がない。)(『裨海記遊』)

それに対して、西川満の「採硫記」は次のように描かれている。

一體この島を化外の地だとか、瘴癘の地だと云ふのが、そもそものあやまりで、現在甘蔗から取れる糖だけでも年に五六十萬、米、麻豆、鹿脯の收穫十餘萬、經營さえよろしきを得ば、田千畝でも數萬人の日食を給し得るほどの米の増産も容易だ。これを中国の瘠せた地味と比べれば、実に南海の楽土、この世の静土だよ<sup>26)</sup>。(『採硫記』)

また、

余向慕海外游、謂弱水可掬、三山可及。今即目極蒼茫、足窮幽險。而所謂神仙者、不過裸體文身之類而。(訳:僕は幼少の頃から外の世界に憧れ、海外の山と海に心が引かれる。しかし、今日にしたのは余りにも荒れた所で、足が踏んだのは険しい土地。それに、神仙という物は文明知らずの裸ものに過ぎない。)(『裨海記遊』)

『裨海記遊』では、台湾で生活していた裸の未開化者たちを野蛮人として捉えているが、西川満の「採硫記」はナハンという蕃童を主人公に設定し、蕃人たちの賢さ、優しさなどを強調し、歴史的な事実はあまり触れていない。

「採硫記」と同じように小説の主体を変えたのは「赤嵌記」である。「赤嵌記」は主人公が幽霊であると考えた鄭克臧と妻の陳氏二人と青年の出会いから話が始まる、台湾の史実をもとにした作品である。この作品では、西川は鄭成功の親子が明を復興する史実をあまり取り入れずに、かわりに鄭克塽をめぐる宮廷闘争を描いた。唯美的描写と皇民化意識の描写を作中にちりばめ、大東亜戦争の重要性を呼びかけながら、歴史を変えてしまったのである。

#### 4. ありえない女性像の構築

西川満の小説に、主人公を女性に設定した作品が多い。これらの作品はヒロインの容貌と体つきがしばしば強調され、耽美的な傾向が強く見られる。しかし、台湾風俗の無理解により、西川満が描写したヒロインたちは台湾人に好まれず、逆に批判された。

「城隍爺祭」は民国初期の台湾社会を背景に、芸娼阿梨の悲しい運命を描いた作品である。芸娼とは、水商売に従事する女のことである。民国初期には、芸娼の仕事を選ぶのは現実の生活にやむを得ず芸娼を選ぶか、または重男輕女の民風が盛んだった当時、両親に芸娼として売られたものである。いずれにしても、芸娼というものは終生救われることのない、悲しい運命の下にあった存在である。

それでも、西川満が描いた阿梨は、老嫗(やくざ)の王朝元に体を狙われても、おみくじや城隍爺への信仰を通じて、自分が幸福になることを信じている。こういう描写に近いのは『華麗島顯風録』(1981年9月9日、人間の星社)に収録された「江山樓附近」、「城隍廟」などにも見られる。

25) 『裨海紀遊』(1979年3月、台湾衆文圖書股份)12頁。

26) 『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』第1巻417頁。

「江山樓附近」では、

朱や黄や緑の美しい絹の長衫をまとった做嬢たちは、暗い小路の停仔脚の下で、客の来るのを待っていた。苦悩も貧困もうちわすれて、ただ一刻の神会に陶醉すべく、膩肉を燃えたたせ、眼を輝かせて（中略）明日の祭りの準備だろう、辻々に慶讚の黄燈がともる<sup>27)</sup>。

それに対して、「城隍廟」では

売られて三年、江山樓の闇に咲く十六の花娘である。凶？ 吉？（中略）かっと見ひらいた范將軍の眼におののきながら、そっと祭壇の筈を擲げると「信」。瞬間、厳かな城隍爺の背後に紫の雲漂うを覚えて、（中略）吉だ。吉だ。あたしは幸福だ、あたしは幸福だ、と小妹は悲しい自らの運命を忘れて、法悦に溺れていた<sup>28)</sup>。

これらの作品はほとんど神様と占いを通して、売春女が自分の惨めな運命を忘れ、幸せになることを中心に描かれている。しかし、これらの描写はなかなか台湾人の読者を納得させず、逆に反感を抱かせることになる。それについて、陳芳明は次のように指摘している。

西川満並不是台湾人，對於社會底層所受的壓迫與剝削不可能了解，甚至是沒有感覺。在他筆下出賣肉體的妓女，都可以輕易獲得昇華。這樣的筆法，其實並不尊重台灣的禮俗；在很大程度上，無異醜化了民間文化。在他的每篇民俗記載，都千篇一律以女性的身體來敘述。即是異國的（exotic），也是異色的（erotic）想像書寫，才是他的主要策略，而不是為了提升台灣的地方文化<sup>29)</sup>。（訳：西川満が描いた売春婦の特徴は、皆容易にカタルシスされている。この描写は台湾の伝統を尊重していないだけでなく、台湾の民間文化もひどく傷つけたのである。）

西川満はお金持ちの出身であり、台湾の社会現象にもあまり理解していないため、彼が描いた弱者はあまり台湾人に認められず、特に女性像の描写は台湾人にとって妥当ではないと言えるのである。

## 五、おわりに

台湾文学の先駆者の一人として、西川満は台湾の郷土文学の開拓のためには、積極的な態度で取り掛かった。にもかかわらず、西川満の業績は台湾文学史に載っていない。小説「城隍爺祭」を皮切りに、台湾をテーマとした作品が数多く発表された。これらの作品は台湾の風物を取材し、高度な表現力と面白い人物像の設定で、巧みに描いた。また「台湾詩人協会」と「台湾文芸家協会」を結成し、機関誌『華麗島』と『文芸台湾』を発表し、台湾人作家の育成にも力を入れた。台湾文学に常に情熱を注ぎこんだ結果、西川満は台湾文学の全盛期を作り出したのである。

しかし、1940年以降、西川満は台湾総督府と提携し、戦争文学の執筆を始めた。この事実が西川満の支持者に大いに衝撃を与えることになる。特に、「大東亜文学者大会」から帰台後、西川は直ちに『一つの決意』と「台湾縦貫鉄道」を連載し、台湾人作家に不満を募らせたのである。例え西川満の小説に、

27) 『西川満全詩集』518頁。

28) 『西川満全詩集』520頁。

29) 『聯合文学』2000年9月号、191期、129頁。

台湾人の思想、台湾の歴史及び台湾人女性像についての描写はあまり台湾人に認められなくても、それはあくまでも小説構成の技法として、西川自分が拘る人工美の実践である。しかし、「瘟王爺」（1939年）以来の小説では次第に皇民意識が高まり、大東亜共栄圏の正当化を試みている。これは西川満文学が台湾文学史に認められない理由の一つではないかと思われる。

それでも、西川満の業績を全般的に否定するわけではない。皇民化運動のイデオロギーを除き、西川満文学は草創期の台湾文学に非常に重要な意味を持っている。なぜなら西川満文学は、台湾文学の萌起を刺激したと同時に、台湾文学の発展に莫大な活気を与えたからである。台湾の文壇で活躍している葉石濤と邱永漢二人とも、西川満の指導を受けた弟子のような存在である。特に葉石濤<sup>30)</sup>は後に台湾で多くの作品を発表し、台湾文壇の大家となっている。

戦後65年後の今日でも、台湾文学を論じるとき、西川満は避けられない人物である。例えそれらの作品が台湾文学界で批判されながらも、その文学的な価値は無視できない。台湾文学史上における西川満の位置づけを確立するために、その文学を全般的に再検討する必要があると言えよう。

付記：本研究は科学研究費の補助金の助成を受けたものである。

---

30) 葉石濤（1925年11月1日～2008年12月11日）。台湾台南の生まれ。西川満の教え子で、台湾文学の先駆者。多くの作品を発表したほか、文学評論にも取り掛かる。代表的な作品は『一個老朽作家的五十年代』、『台灣文學史綱』、『追憶文學歲月』などがある。

